

優秀賞

愛、大切なお母さん

愛知県 名進研小学校五年 市原 秀都

ぼくはケンカした。大切な大切なお母さんと。でもその大切さ、分かっていなかった。それを分かったお話し、読んでください。

午後六時学校から帰った。朝からケンカしていたお母さんと会いたくない。というか会えない。どうしよう。

「じゃあ会わなきゃいい。」

ぼくは走り出した。体が勝手に動くんだ。夕暮れ時の田がどんどんうしろに飛んでゆく。自分がひどい事を言っちゃっただけなのにお母さんのせいにした。もう二度と帰りたくない。帰れない。もういい。

「この世の全て消えちゃえ。」
思いつき走る。

少し落ち着いた。のどがかわいた。近くの公園をさがした。十五分くらいで見つけられた。

「ゴクン、ゴクン。」

水道で思いっきり顔を洗い、水を飲む。すっきりした。ドラマで主人公が一人ぼっちでブランコに乗っているシーンを見たことがある。その真似をしてブランコに乗った。小さなゆれをいじした。ふと時計を見た。午後七時。まあいっか。そう思いながらもなんとなくつまるものがあつた。

公園を出た。それから、色々一人で楽しんだ。バッタのストーカーを試してみたり、本気で走ってみた。こんなことをずっとしているとおなかが減ってきた。あっそうだ。本当ならごはんを食べている時間。お母さん、なにしているかな。いけない、いけない。でも帰ろ。っていうかここどこ？道路の表示を見た。栄まで二キロって書いてある。家から十キロぐらい歩いたということだ。帰ろう。帰れないかな？大丈夫、大丈夫。いままで来た道を少しづつもどる。道を歩いている人に聞いたこともあつた。

「ハア、ハア。」

いつもなら気絶していたかもしれない。でも今日は、ちよっとつかれただけ。なぜだろう。走る。走る。夜の田がきらめきながら飛んでゆく。ただ、行きの飛び方となにかがちがう。

そして家の前の信号まできた。ここをわたれば家だ。

「ドクン、ドクン。」

わたれた。もうここは家の前。あとはチャイムをならすだけ。ピンコーン。夜道にチャイムがひびいた。出た。お父さんだ。父の声は重かった。うしろでお母さんが泣いている声がきこえる。ドアがしずかにひらいた。親二人がでてきた。お父さんはしかめ声。お母さんは大泣きしている。ぼくはお母さんの胸にとびこんだ。その時、お父さんの青いスマートフォンに音楽がなった。

「けいさつですか？」

ケイサツ？そう両親は警察、さらに学校にまで電話をしていたのだ。このときぼくは自分のおかした罪の重さ、そしてぼくのこの立場。そう愛に気が付いた。ごめんね。あと、いつもありがとう。

